

# 大阪大学外国語学部外国語学科スペイン語専攻紹介



海外交流

長谷川 信 弥\*

Osaka University, School of Foreign Studies, Spanish Section

Key Words : Spanish

スペイン語といえば、誰もが思うスペインだけでなく、メキシコから南のアメリカ大陸の多くの国で公用語である。アメリカ合衆国でもいわゆるヒスパニック系住民によって話されている。

今年2013年は支倉常長を大使とする慶長遣欧使節団が日本からはじめて公式の使節団としてスペインに派遣され400周年にあたることから、「日本スペイン交流400周年事業」として、文化事業だけでなく、政治、経済、科学技術、観光、教育等の幅広い分野で交流事業がおこなわれている。

## 1. 日本でのスペイン語

日本における、のちに大学となる機関でのスペイン語教育は、東京外国語学校、いまの東京外国語大学が最初で、1897年の創立時（当時は高等商業学校附属外国語学校、1899年に東京外国語学校）から教えられている。

本学のスペイン語教育については、2007年10月に大阪大学と統合した大阪外国語大学の前身である大阪外国語学校の創立時（創立1921年、開学1922年）からおこなわれている。最初は西語部と称されたが、これはスペイン語が漢字で西語、これを略して西語とよばれていたからである。資料によると、最初の募集定員は10名であったとされ、教員は外国人と東京外国語学校出身の教員とで構成されていた

ようである。大阪外国語学校は、戦中の大阪外事専門学校をへて、1949年に新制大阪外国語大学となるが、その間も続けてスペイン語の卒業生がいる。なお、大阪外国語大学では、いまでも神戸市外国語大学や上智大学が用いている、古くからの名称である「イスパニア語」を言語名として、イスパニア語科としていたが、1990年代に「スペイン語」専攻に変更した。戦後はスペイン語を専攻できる大学が増え、現在では上述の各大学以外にも、南山大学、京都外国語大学、関西外国語大学などで専攻課程が開設されている。

## 2. 外国語学部スペイン語専攻

2007年10月の大阪外国語大学と大阪大学の統合にともない、それまでの1学年50名の定員だったスペイン語専攻は、大阪大学外国語学部外国語学科スペイン語専攻として35名の定員となった。この人数は英語専攻（60名）、中国語専攻（40名）に次ぐ大きさで、ドイツ語専攻と並び大所帯といえる。教員は所属する大学院言語文化研究科と外国語学部の専任として5名と特任教員（外国人教員）1名、そして他部局との兼任教員2名の体制となったが、これは大阪外大時代の最大人数である専任10名、外国人教師1名からすればおよそ半数となった。ちなみに、外国語学部のホームページがこの4月にリニューアルされ、スペイン語専攻の教員の一覧などが掲載されている。

学部生については、ここ数年の傾向として、その多くが留学することが特徴といえる。留学には、交流協定のある大学へ行く留学と、休学をして希望する大学に留学するケースがあり、今年度は3年生のうち25名がいずれかの方法でスペインやメキシコなどの中南米諸国に留学している。これはここ10年来の傾向で、留学することが当たり前のような



\* Shinya HASEGAWA

1962年8月生  
大阪外国語大学大学院外国語学研究所修士課程修了  
現在、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 教授 文学修士  
スペイン語学  
E-mail : shinya@lang.osaka-u.ac.jp

っている。就職に関しては、従来からの金融、商社、メーカーはもちろんのこと、あらゆる職種に就職する機会が増え、また、大学生一般に広まっている公務員志望も反映して、国家公務員、地方公務員を問わず志望者が増えている。

### 3. スペイン語とは

スペイン語は、ローマ帝国の言語ラテン語、より正確には口語のラテン語である俗ラテン語が変化したものであり、同様の経緯を持つフランス語、イタリア語、ポルトガル語などと姉妹関係にある。スペインのあるイベリア半島にローマ人がやってきたのは、紀元前218年、第二次ポエニ戦争の際であり、その後イタリア半島以外のはじめての属州として発展した。その際、ローマ人よりも以前からイベリア半島にいた住民は、バスク語を除き、すべてラテン語を使うようになった。バスク語は、現在もスペイン北部、フランス南西部で話されている。さて、繁栄を極めたローマ帝国も、4世紀から5世紀にかけてのゲルマン民族の移動を契機として崩壊し、俗ラテン語は地域ごとに発展しはじめる。スペイン語がはじめて確認される文献は10世紀末とされ、中世末から近世にかけての「スペイン」の誕生とともに、国家語として確立していく。15世紀末のアメリカ大陸到達によって、スペイン語は中南米・南米へも進出し、現在では20カ国以上の国々で公用語として使用されている。

次に、スペイン語の特徴を学習者の観点から紹介する。スペイン語はローマ字を使用しているが、ñ(エニェ)という独自の文字があり、また倒立疑問符¿を疑問文に、倒立感嘆符¡を感嘆文の文頭に置くという、他の言語から見分けやすい特徴がある。発音は、日本語話者にとって比較的容易である。母音は日本語のa,e,i,o,uとほぼ同じの5つしかなく、子音の発音も容易なものが多いが、「日本」を意味するJapónは、Jaが「ハ」と読まれ、「ハポン」となる。「ジャ」とは発音されないので注意がいるうえに、この語の強勢は「ポ」にあるのでこれを他の音より強く発音しなければならない。このように基本的にローマ字読みをすればよいが、大切なのはアクセント(強勢)をしっかり意識して、位置を間違えないように読むことである。いずれにしても、文字と音の対応は一定であるうえ、アクセント位置

のルールも容易なので、正しく書かれた文章であればすぐに発音できるようになる。

スペイン語は、英語などと同様に、主語—動詞—目的語の語順が基本の文型であるが、動詞が人称や数によって細かく活用するため活用形から主語がどれであるかがわかるので、これを省略することができる。英語とは大きく異なる点であり、日本語と似ている点である。

上述のとおり、動詞の活用は、一人称から三人称まで、単数と複数それぞれに語尾が異なるので、ひとつの時制で6つの活用形を覚えなければならない。初学者がもっとも驚き、あるいは挫折するところでもある。しかし、一見複雑に見える活用語尾にもパターンが存在し、コツをつかんで覚えると意外に早く覚えることができる。

名詞には男性名詞と女性名詞の2種類があり、その形態から見分けのつくことが多い。事物では対象となるものとこの文法性の間には必然的な関係はない。ペンplumaは女性名詞であるが、ノートcuadernoは男性名詞といったぐあいである。これらは文法性を表しているだけで、実際にペンが女性的であるかどうかということは考えても無意味である。文法性をほぼ失っている英語と比べると、学習上困難を伴うかもしれないが、それほどの障害になるものではない。

話しを語順に戻すと、英語とは若干異なる点として、主語の省略を述べたが、それとともに語順の自由が挙げられる。すなわち、文型がはっきりと決まっている英語に比べれば、自由度が高いのである。とはいうものの、大半はパターン化していて、要は慣れの問題でかたづいてしまうものも多い。たとえば、「私はサッカーが好きだ」という文は、Me gusta el fútbol. となり、主語は「サッカー(el fútbol)」(elは定冠詞)、Meは「私に」という間接目的格の人称代名詞(英語meに等しい)で、動詞gustarが現在形三人称単数に活用していて、全体として「サッカーが私に気に入っている」という構文を常につくる。この構文では、ほぼいつも主語が動詞よりも後ろにくるのでパターンとして学習すればよい。

語彙の特徴としては、ラテン語の語彙を受け継いだものが圧倒的である。フランス語から大量の借用語を取り入れた英語と同語源のものが目立つため、学習時には英語の知識が大いに役立つ。さらに、イ

ベリア半島に進出してきたイスラムの勢力が残したアラビア語からの借用語が、他のロマンス語との違いを際立たせている。

最後に、スペイン語の文章として、スペイン文学

史上もっとも有名なドン・キホーテの最初のくだりを紹介する。作者のセルバンテスは、16世紀半ばから17世紀初めの人物なので、以下の文章は17世紀初頭のスペイン語であるが、現在のそれとあまり変わらない。

En un lugar de la Mancha, de cuyo nombre no quiero acordarme, no ha mucho tiempo que vivía un hidalgo de los de lanza en astillero, adarga antigua, rocín flaco y galgo corredor. Una olla de algo más vaca que carnero, salpicón las más noches, duelos y quebrantos los sábados, lantejas los viernes, algún palomino de añadidura los domingos, consumían las tres partes de su hacienda.

(それほど昔のことではない、その名は思い出せないが、ラ・マンチャ地方のある村に、槍掛けに槍をかけ、古びた盾を飾り、やせ馬と足の速い猟犬をそろえた型どおりの郷土が住んでいた。羊肉よりは牛肉の多く入った煮込み、たいていの夜に出される挽き肉の玉ねぎあえ、金曜日のレンズ豆、土曜日の塩豚と卵のいためもの、そして日曜日に添えられる小鳩といったところが通常の食事で、彼の実入りの四分の三はこれで消えた。[牛島信明訳「ドン・キホーテ前編 (一)」岩波文庫、p. 43])

